

## 様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 5月15日現在

研究種目：若手研究（B）  
研究期間：2006～2007  
課題番号：18720063  
研究課題名（和文） フランス現代詩におけるミニマリズムの意義の比較的総合研究  
研究課題名（英文） Comparative Study on the Minimalism in Contemporary French Poetry  
研究代表者 ヴィラン フランク  
(Villain, Franck )  
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授  
研究者番号：20334071

### 研究成果の概要：

今日現代世界はグローバル化するとともに多極化し、人と人を繋いできた従来の価値は、この世界的状況にみあう新たな基盤を探索している。我々の研究は、フランスの現代詩人たちが「わずかな絆 (lien du peu)」を軸に彼らのエクリチュールを展開することで、この問題にどのように応答せんとしたかを明らかにした。詩人たちは、我々を世界や人々と結びつけているものがいかにわずかな、ほとんど無とあってよいものに拠っていることを確認することから出発し、言葉の節約、空無、残余、欠如、空虚の上に築かれうる生への関係に光を当て、かつ、平明さの簡潔性に基礎を置いた価値へのアプローチを強調したのである。

### 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	0	1,700,000
2008年度	700,000	0	700,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	270,000	3,570,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：フランス現代詩、俳句、ミニマリズム、「はかなさ (fugacité)」、「簡素化の技術 (art de peu)」、Jacques Dupin、Pierre Chappuis、Antoine Emaz

## 1. 研究開始当初の背景

西洋世界における芸術のおおきな部分は、第二次世界大戦以降、とりわけ削除の美学により占められてきた。この美学は、本質的にその当初から、簡素さ、直接性、物質的接触、と再び結びつこうとする欲望と、大文字の歴史 (l'Histoire) の危機によって提起された大きな思想 (l'Idée) のシステムの崩壊に答えようという欲求に、独自の方法で結びついていた。

この「わずかさ」への傾向は、1950年代以降本格化した日本の詩とりわけ「ハイク」のもつ最小限の表現によるポエジー性への関心、1970年前後の EPHEMERE という雑誌の発刊、さらには、" lieu" (「場」) の概念が与えてくれるものの探求、" fragment" や " formule" といった詩の言葉の定義をめぐる思考の数々などをおして、我々の現代にいたるまで長く、詩的・芸術的生産活動の中に据わり続けることとなった。

しかしこの詩的・芸術的傾向は、思想的営為の中では様々な形で言及されては来たけれども、詩の現場における綿密な分析をおしてその実際が全体が十全なかたちで研究の対象となってきたとは言い難い。

我々の研究は、この傾向の変遷を、とりわけ Jacques Dupin、Antoine Emaz、Pierre Chappuis、Madeleine Gagnon らを中心としたフランス現代詩人の詩の現場に則しつつ、「わずかさ」という概念をキー・コンセプトとして読み込み、分析することで、明らかにせんとしたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「わずかさの美学」が第二次世界大戦後ヨーロッパに発生した大文

字の歴史の危機を乗り越える、社会的価値の伝達者であることを証明することである。実際、スペクタクル社会、極度の消費、「大きな物語」の終焉に対するリアクションとして、この「わずかさ」への嗜好は今日自らを、他者と世界への別の絆を提供する役割を担った、倫理的要請の支柱として提示している。この絆は、新たな形態の社会性を示し、この社会性において「わずかさ」への傾向は、より一般的に共有しうる簡明な感情に関与している。

このように、「共同」と言われる生はもはや、ある確固としたイデオロギーの光明に頼って築かれることはないであろう。逆に、その出来はどうあれ、小さな仕草、日常、無味乾燥さ、退屈、平凡な取るに足らない感情、それらから引き出されたちょっとした言葉、そういったものの周囲に分節され、以後芸術はそれらの内に、その手段と力をもとうとするのである。

## 3. 研究の方法

本研究は、

- 1) まず補助的な作業として、エクリチュールと共同体の紐帯を思考した Jacques Ranciere、Jean-Paul Sartre、Jean-Luc Nancy らといった哲学者らの書物を参考にし、
- 2) 次に Jacques Dupin、Antoine Emaz、Pierre Chappuis、Madeleine Gagnon らフランス現代詩人の詩世界の詳細・綿密な分析を行う、というふたつの段階をおして進められた。また、その過程で、
- 3) 国内外の研究者との意見交換・交流の場を設け、さらなる視点の拡大と深化をはかる、という作業を行った。

#### 4. 研究成果

小さきもの、縮小や言葉の「わずかさ」に基礎を置いた美学を選択し、1945年以後フランス詩は、フランスにおける第二次世界大戦に続いた人間主義的価値の再考と危機の時代を引き受け、「多数の人々」を結びつける新たな手段を探すことで、この危機に答えるための新たな方法を再定義しようとした。それゆえ、重要なのは、ある政治党派の下で、あるいは何某の大義やイデオロギーの名の下で、思考し書くことではない。大文字の歴史を成す一員としてではなく、境界なき、そして本質的に日常性の中に根ざした世界の住人として人間を再定義するべく、各人の平凡な部分に語りかけることが重要なのである。日常、日々の生活の単純な行為は、このようにして、時間、生、エクリチュールへの人間の見直し共通の地盤として現れるのである。

そしてここにおいて、詩のありようがクローズアップされる。

詩とは空(くう)から、悲嘆から、そして表現の葛藤から、人と世界とを再び結びつけることのできる表現世界である。したがってミニマリズム的エクリチュールは、この葛藤を乗り越える活力を与えることのできる言語活動なのである。ピエール・シャピュイにおいてもマドレーヌ・ガニョンにおいても、ミニマリズム的エクリチュールとは言葉の持つ力をただ小さくしただけのものではなく、むしろイデオロギーの言述に相対する言語活動を退き、神秘と驚嘆に結びつく根源へと言葉を集約することである。「わずかさ」の言葉とは、ここでは言語の覚醒であり、言語欲動への回帰なのである。

そしてこの成果は、あらためて、フランス

現代詩の関心事と日本のポエジーとが、「わずかさ」を梃子としてどのような交差を形成しうるかの研究に、我々を誘うものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

① Franck Villain, " Pays, appartenance et poésie : *Chant pour un Québec lointain* de M. Gagnon ", 『外国語教育論集』第26号、筑波大学外国語センター、121～137頁、2009年

② Franck Villain, " Valeurs du peu dans *De nul lieu et du Japon de Jacques Dupin*" in *L'art du peu*, 査読有、111～124頁、2008

③ Franck Villain, " La poésie de Pierre Chappuis : dans les fils blancs de l'oeil" in *La vue et la voix*, 査読有、80～92頁、2008

④ Franck Villain, " Part commune, lieu commun. La force-forme du poème" in *Quel autre ? L'altérité en question*, 査読有、177～195頁、2007

⑤ Franck Villain, " L'homme ouvert de Jacques Dupin" in *Matière d'origine*, 査読有、21～30頁、2007、Faire Part, 20号

⑥ Franck Villain, " René Char et le "vivre ensemble" : le présent en partage" 『比較市民社会・国家・文化特別プロジェクト平成17年度研究成果報告書』、筑波大学比較市民社会・国家・文化特別プロジェクト研究組織、425～442頁、2006年

⑦ Franck Villain, " Littérature et politique en France de Dreyfus à Jean-Paul Sartre", 『外国語教育論集』第26号、筑波大学外国語センター、121～137頁、2006年

[その他] (計1件)

① Franck Villain, コロキウム *Les liens du peu* 開催 (Michele Aquien パリ XII 大学教授、Pierre Ouellet ケベック大学教授、Stephane Hirschi ヴァランシエンヌ大学教授などフランス人研究者9名、日本人研究者3名参加)、筑波大学にて、2008年11月22・23日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ヴィラン フランク (Villain, Franck)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・

准教授

研究者番号：20334071